

恋愛感情と安心感の質問紙調査による関連性の検討

Exploring the relationship between romantic love and reassurance using a questionnaire survey

神岡 拓真[†], 布山 美慕[†]
Takuma Kamioka, Miho Fuyama

[†]立命館大学

Ritsumeikan University

lt1243ps@ed.ritsumei.ac.jp, miho02@sj9.so-net.ne.jp

概要

本研究では、恋愛感情の特徴づけの一步として、自己肯定感、対人関係など複数の要素を含む感情としての安心感と恋愛感情の相関を分析した。先行研究の恋愛感情と安心感に関する尺度を用いてアンケート調査を実施した。調査の結果、安心感は「他者、社会へのはたらきかけに対する自信」、「自己肯定感と自己受容」「恋愛に対する感情の安定性」という3つの要素で恋愛感情に関係していることが示唆された。

キーワード：感情、恋愛、愛情、安心感

1. 背景

「恋愛感情（romantic love）」は、社会学、哲学、心理学など様々な分野で取り上げられる概念である。しかし、心理学において、恋愛感情の定義や心理的な機構に焦点を当てた研究は、Lee (1973) や Sternberg (1986) など以降は、研究数自体が減少傾向にある（松井, 1993）。研究の減少には、恋愛感情を実証的に研究する際に基盤となる定義（あるいは構成概念の特徴づけ）が不十分である事が考えられる。その為、心理学分野における恋愛感情がどういった構成概念なのかを明確にする一步として、恋愛感情と関連があると考えられる安心感との関係を検証する。

本研究では、恋愛感情と、関連性があると考えられる安心感との相関を、尺度を使った調査によって検討する。まず、恋愛そのものについての思想、態度を調査するため、恋愛感情の尺度を用いてアンケート調査を行う。同時に、安心感について質問紙調査を行い、その関連性を考察する。

恋愛感情と安心感の関連性は、中井 (2020) の実験によって示唆されている。中井は、安心感が恋愛関係における親密性を支える因子の一つとしており、また安心感の定義を「他者に対する信頼感の主観的にポジティブな側面」としている。しかし、安心感という語を言葉通りに解釈するならば、それは必ずしも他者のみに対する感性ではなく、自己肯定感、身体状態など様々な要素に依存した概念であることが考えられる。よって、本研究では安心感の意味をより広く捉えた岩

瀬・野嶋 (2015) の尺度を用いて安心感について調査し、恋愛感情と安心感の関係を調べる。

2. 方法

実験参加者は、10代から20代の大学生・大学院生を対象とし、合計15件の有効回答を得た。実験はQualtricsを使用してオンラインで行った。

使用した心理尺度は、安心感に岩瀬・野嶋 (2015) を使用し、恋愛感情は和田 (1994) を用いた。安心感尺度は情緒が安定しているかを表す「おだやかである」因子、ストレスの有無を表す「不安・苦痛が少ない」因子、悩みや問題への姿勢を表す「楽観的志向である」因子、自身の存在を受容する「自分を肯定している」因子、自分の考えや行動が正しいという自信がある「自分に自信がある」因子、問題の解決やストレスへの対処ができているかの自負を表す「自分で安心できる能力がある」因子、他者との信頼関係を築けているかを問う「対人関係に確かさがある」因子、そして社会的な自己評価を示す「社会とつながっている」因子の8因子で構成されており、計94項目の質問からなる。恋愛感情尺度は4因子で構成されている。それぞれ、「恋愛至上主義」因子は恋愛感情と恋愛関係が人生において最も価値のあるものであるとする傾向を表す。「恋愛のパワー」因子は恋愛関係が人生の様々な障害を乗り越える活力となるとする考え方を表す。「結婚への恋愛」因子は恋愛を結婚とつながる関係として捉える因子である。「理想の恋愛」因子は恋愛に完璧な人間関係を求める傾向を表す。計43項目の質問からなる。全ての質問には、「まったく同意しない」「あまり同意しない」「どちらともいえない」「多少同意する」「強く同意する」の五件法での調査を行った。

倫理的配慮 調査の際、研究内容、および、本研究への参加は自由意志であり、参加しない場合にも何ら不利益は生じないこと、回答は匿名化されて管理されることなどを明記した説明書を配布した上で、口頭でこ

表1 安心感と恋愛感情の各因子間の相関係数

	恋愛至上主義	恋愛のパワー	結婚への恋愛	理想の恋愛
おだやかである	0.18	0.24	0.42	0.12
不安・苦痛が少ない	0.04	0.30	0.30	0.04
楽観的志向である	-0.14	0.22	0.30	-0.12
自分を肯定している	-0.07	0.21	0.18	0.03
自分に自信がある	-0.39	-0.04	0.02	-0.36
自分で安心できる能力がある	-0.02	0.22	0.31	0.05
対人関係に確かさがある	0.05	0.19	0.11	0.09
社会とつながっている	-0.44	-0.17	-0.14	-0.31

れらを説明した。オンラインでの参加をもって同意とした。

3. 結果

回収した26件の回答の内、欠損値が見られた11件を除いた15件の回答で相関分析を行った。現状ではサンプルサイズが小さいため、本調査は予備的結果とし、今後統計的分析に耐えるサンプルサイズでの再調査の基盤とする。なお、以下に報告する相関は5%有意水準の無相関検定においてすべて有意ではない。

安心感尺度の8因子、恋愛感情尺度の4因子の得点の相関を求めた(表1)。具体的には、以下の方法で相関を求めた。安心感尺度では参加者の回答を「おだやかである」因子の8問、「不安・苦痛が少ない」因子の6問、「楽観的志向である」の10問、「自分を肯定している」の18問、「自分に自信がある」の14問、「自分で安心できる能力がある」の13問、「対人関係に確かさがある」の9問、そして「社会とつながっている」因子の16問に分けた。恋愛感情では、「恋愛至上主義」因子の11問、「恋愛のパワー」因子の8問、「結婚への恋愛」因子の11問、「理想の恋愛」因子の7問をそれぞれ分けた。参加者一人ずつの回答を因子ごとに平均し、得られた平均値同士を恋愛感情尺度の因子と安心感尺度の因子間で相関分析した。

まず、恋愛感情や恋愛関係を人生や人間関係の中で最も重視する「恋愛至上主義」因子が、安心感尺度の「自分に自信がある」因子、「社会とつながっている」因子とそれぞれ弱い負の相関傾向(ピアソンの積率相関係数 $r = -0.44 \sim -0.39$ 、以降同様)が見られた。この2因子と0.4前後とやや負の相関が表れているという点において、恋愛を理想化した傾向の「理想の恋愛」因子

が、類似の傾向を示している。

残る恋愛感情の2因子は、どちらもほとんどの安心感因子と正の相関傾向が確認された。そのうち、恋愛を結婚と結び付けて考える「結婚への恋愛」因子は、安心感の「おだやかである」因子、「不安・苦痛が少ない」因子、「楽観的志向である」因子、「自分で安心できる能力がある」因子との弱い正の相関が見られた($r = 0.30 \sim 0.42$)。恋愛が人生や人間関係の障害を乗り越える支えになると考える「恋愛のパワー」因子は、「自分に自信がある」因子と「社会とつながっている」因子以外は共通して0.2前後の正の相関を持っており、中でも「不安・苦痛が少ない」因子と強い相関を持つことがわかった。

全ての因子間の散布図を表2に示す。安心感尺度、恋愛感情尺度の順に因子同士で回答を散布図に表している。その中でも比較的相関傾向が見られるのは、恋愛感情尺度の「恋愛のパワー」因子と安心感尺度各因子である。この因子は負の相関が読み取れる「社会とつながっている」因子以外は一貫してゆるやかな右肩上がりの散布を示しており、相関係数において、弱い正の相関が多い様子とも一致する。一方、相関が無いように見える散布図が複数個見られる「結婚への恋愛」因子の相関行列は、相関係数が0.02の「自分に自信がある」因子の分布と相関があるように見られる。また、共通して恋愛感情と負の相関が見られる散布図として、安心感尺度の「社会とつながっている」因子の行が挙げられる。この因子と恋愛感情因子の散布図は、外れ値を除いた散布の傾向が集中しており、かつ負の相関が見られる点も因子間で類似している。これは、社会的な自己評価が恋愛の捉え方に全体的な影響を与えていることの示唆とも捉えられる。

表2 各因子間の散布図



4. 議論

結果の考察 まず、安心感との相関関係が類似している「恋愛至上主義」因子と「理想の恋愛」因子について考察する。この2因子が含む設問は、恋愛感情や恋愛関係に特別な価値を置いているという点で共通している。また、これらに対して強い相関を持っているのは「自分に自信がある」因子と「社会とつながっている」因子である。これらは、自身が周りに受容され、はたらきかける能力を持っていると感じる傾向を表す因子だと捉えられる。そのため、これらの因子の相関から、対外的な自信を抱きにくい人物は恋愛を理想化しやすい傾向にあることが示唆されている。

次に、「恋愛のパワー」因子について検討する。この因子は、「自分に自信がある」「社会とつながっている」の2因子以外の安心感に対し、0.2前後かそれ以上

の正の相関が見られる。相関の弱い2因子が外的対象にはたらきかける際の傾向を表すのに対し、正の相関を持つ6つの安心感因子は、自身の内的な状態の安定性を表すと考えられる。これらの点から、ストレスが少なく、自己肯定感や自己受容が安定している程、恋愛に関する問題解決に対して前向きな考えを持つ傾向が示唆される。

最後に「結婚への恋愛」因子と安心感の関係について検討する。この因子はほとんどの安心感因子と正の相関傾向が見られ、特に「おだやかである」因子、「不安・苦痛が少ない」因子、「自分で安心できる能力がある」因子が0.3以上の相関を持っていることがわかる。前者の2因子が一時的な状態での意味合いにもとれる内容であるのに対し、後者はそのような状態に自身を誘導することができるかを主観的に判断した内容の因子と捉えることができる。また、この3因子は「恋愛至上主義」や「理想の恋愛」など、恋愛を理想化、過大評価する因子とは相関が比較的弱い。これらのこと

から、おだやかな感情を保つことができる人は、恋愛を誇張して考える傾向が弱く、結婚という現実的な関係への糸口として捉えていることが考えられる。

結論 本研究では、恋愛感情と安心感の持つ因子を相関分析することにより、恋愛感情の一要素としての安心感がどのような形で恋愛感情に関連しているかを検討した。その結果、安心感は恋愛感情との関係性において、内的、外的な自己評価の高低と、感情の安定性という3つの要素に区分されると考えられる。また、それぞれの側面から恋愛感情の捉え方に影響を及ぼしているということも示唆された。具体的には、対外的・社会的な自信の抱きにくさと恋愛の理想化傾向の関係、自己受容と恋愛に関する問題への考え方の関係、そして感情の安定性と恋愛関係の捉え方の関係が読み取れた。

今後の展望 本研究では既存の尺度法を用いて恋愛感情、安心感の因子とその相関を検討したが、それゆえに実験参加者の恋愛および安心感に対する傾向を十分に反映できたかについては懸念が残る。そのため、今後は自由記述式アンケートのテキスト分析など、回答の自由度の高い調査方法の併用を検討している。また、調査対象とするサンプルが15件と少なかったことも、恋愛感情の捉え方が個人によって異なる可能性から考えても、大きな課題である。今後はより大規模な調査を実施する必要がある。

5. 参考文献

岩瀬貴子・野嶋佐由美 (2015) . 安心の尺度開発～信頼性と妥当性の検討～. 高知女子大学看護学会誌, 40 (2) , 81-91.

Lee, J.A. (1973) . Colors of love: An exploration of the ways of loving. Tronto: New Press.

中井大介 (2020) . 恋愛関係への動機づけと恋人に対する信頼感および親密性の関連. パーソナリティ研究, 29 (2) , 78-90. <https://doi.org/10.2132/personality.29.2.6>.

Sternberg, R.J. & Weis, K. (2009) . The New Psychology of Love. (スタンバーグ, R.J. & ヴァイス, K. 和田実・増田匡裕 (訳) (2009) . 愛の心理学 北大路書房) .

和田実 (1994) . 恋愛に対する態度尺度の作成. 実験社会心理学研究, 34 (2) , 153-163. <https://doi.org/10.2130/jjesp.34.153>.